安蘇史談会　会報『史談』第三一号（平成二七年五月）抜刷

須永文庫とゆかりの地

大川圭吾

須永文庫とゆかりの地

大川圭吾

はじめに

一昨年の平成二五年（二〇一三）に、佐野市は田中正造翁没後百年顕彰事業として、行政と市民が協力して様々な行事を行いました。私自身田中正造の偉大さに意義を唱えるものではありませんが、全く別の意味で佐野市が生んだ須永元を忘れることはできないと思います。田中正造と須永元は、少なからず交友があったようです。全く別の人生を歩みながらも二人ともに歴史に大きな足跡を残しました。にも関わらず、田中正造に比べて須永元の方はほとんど無名に近いのが現状です。その理由にはいくつか考えられますが、日本との関係が昔から難しかった、いや今に至るほどさらに難しくなった感のある韓国・朝鮮との関係から来ているのは明らかでしょう。だからこそ、須永にここでローソクの光のような小さな光を当てることは無意味ではないと考えています。

なお須永文庫の名前は佐野市郷土博物館のホームページに「須永文庫資料」として概要が公開されていますので、参考にして下さい。また郷土博物館には、補助金をもらって作成した、須永文庫がパソコン上で検索できるシステムが完成しております。一度会館を訪れて須永文庫に触れて見てはいかがでしょうか。彼の偉大さの一端が垣間見られると思います。

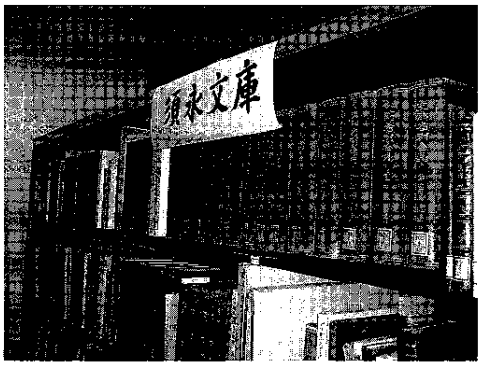

写真１　佐野市郷土博物館保管の須永文庫

一．須永文庫とは

ここで須永文庫の簡単な説明をしておきます。須永元が亡くなる一年前の昭和一六年（一九四一）秋に頭山満は須永元の願いを受けて筆頭発起人となり、財団法人日朝志士記念会館を建設して旧蔵の書籍・文書類を公開しようとしました。しかし、戦局の急変により計画は中断してしまい、

その後、昭和三七年（一九六二）にこの蔵書類を管理していた日韓国士顕彰会代表の広瀬仙蔵氏より、同顕彰会の解散にともない佐野市立図書館に一括寄贈されました。現在では洋書装以外のものは郷土博物館に移管されておりますから、分割されて二箇所に所蔵されています。書籍類は和洋書、漢籍・準漢籍のみで約一三〇〇〇冊にものぼり、そのうちの約一〇〇〇〇点を博物館で保管しています。その中には、宮内庁を通して昭和天皇に献上された『佐野史蹟写真帖』も含まれており、須永邸の前に立つ須永と入り口に立つ奥さんの写真とともに金玉均、禹範善、黄鉄の顔写真も載っています。

なおこの佐野史跡写真帳は、宝竜寺の第三二世住職であった小林在龍氏が発起人となって作成しました。またこの写真帳（昭和九年（一九三四）に刊行）は龍の巻と虎の巻の二部に別れており、龍の巻のみが天皇家に献上されたそうです。須永元が題詩を書いており、顧問になっています。〝佐野〟史跡写真帳と命名された写真帳ですが、旧佐野市に限定されている訳ではなく、田沼、葛生を含んでいます。驚くべきことに八〇年以上も前に作られていながら、現在の合併を予測したような本です。

写真２　佐野市図書館保管の須永文庫

なお禹範善は広島県の呉市で刺客高永根により暗殺されてお墓は呉市の神応院と佐野にあります。広島県呉市の竹川市議会議員が呉と韓国と言う題名で禹範善のことを紹介していましたので直ぐに連絡を取り、神応院の住職さんを紹介してもらいました。お墓は昭和四二年（一九六七）に幼稚園を建てる時に移動し、その下から遺骨が出てきたと聞きました。韓国からのお参りにしてくれる人のために平成八年（二〇〇七）の一一月に隅にあったのを表の方に二度目の移動をしたそうです。

このほか須永元日記六冊、金玉均の書簡や、閔妃暗殺事件予審集結決定書、金玉均の墓碑建立に関する陳情書などの手写し本、日本・朝鮮の著名直筆の書画など特殊資料として分類されているものが約一〇〇〇点あります。これらは、須永と朝鮮亡命政客との関係だけではなく、近代日朝関係を研究する上でも貴重な資料とされています。

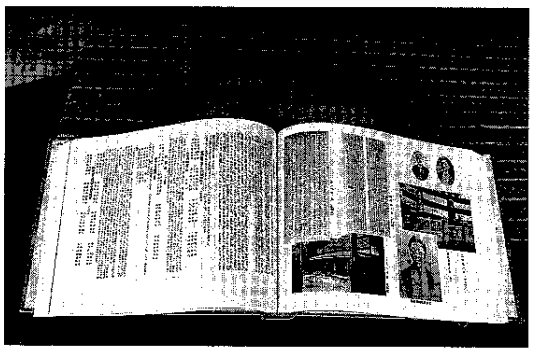

写真３　『佐野史跡写真帖』（復刻版）

二．須永文庫の状況

現在の須永文庫の状況ですが、郷土博物館に確認したところ、巻物、書画帖、掛け軸等の特殊資料も整理が完了したとのことでした。ちなみに整理の期間は昭和六一年（一九八六）から始まり平成九年（一九九七）で完了したそうです。総費用は二〇七〇万円で、そのうちの七五〇万円が県からの補助金であり、書画の表装が七四二点で一七八七万円、桐箱が二八七個で二六八万円、残りがその他となっています。特に平成元年（一九八九）から平成四年（一九九二）にかけての整理が多く、平成四年（一九九二）がピークで費用として五〇四万円、そのうちほぼ半分の二五〇万円は県からの補助で賄ったと聞きました。

こんな須永文庫ですから佐野市議会でも何回か話題となっております。たとえば平成八年（一九九六）二月の定例議会では林邦英議員が、須永文庫の収蔵資料の内容と整備費用について聞いています。また平成一一年の一二月定例議会では寺内富士夫議員の質問に関して当時の毛塚市長はかなり長く答弁をしており、私も当時は議員でしたからこの答弁を興味深く聞いたのを覚えております。

写真4　黄鉄の墨絵（佐野市郷土博物館蔵）

答弁の要旨だけを述べると次のような内容でした。「大橋町のプールは、元々が須永邸の跡地でございますから、できれば膨大な資料があります須永文庫といいますか、須永家の貴重な資料を多くの市民の皆さん方に見ていただくチャンスをつくりたい。そこで須永邸の復元とまではいかなくても、ややそれに近い施設をつくりたいと思っておりました。そんな時に市内の旧家でありますお宅が屋敷を無料で差し上げたいとの話があり、それならば須永邸跡地に移築できなかと考えた訳です。しかし、移築するには大変なお金がかかるということで、残念ですがこの話は進んでいません」との答弁でした。私もとても残念に思いましたが、財政状況を考えるとしかたないように感じました。

三．須永の評価が低い理由

その後、平成一三年（二〇〇一）六月議会で私も須永元と須永文庫についてというテーマで何件かの質問を行いました。議会で質問した内容をもとに「須永元とその時代」

と改題し、私のホームページ・みかも新聞にアップしました。私のホームページは宣伝もしていないせいか閑古鳥ホームページであり、あまりアクセス数はありませんが、この須永元に関してだけは例外で日本全国から様々な問い合わせがあり驚いています。

フリージャーナリスト、大学院生、教師など職業や年齢なども色々です。須永元と頭山満の関係を示す資料を教えて欲しいとか、須永元のお墓の場所を教えて欲しいとのお願いもありました。すでに佐野から離れている遺族の方に連絡をとり、鎌倉霊園の場所を教えてもらい依頼者へ連絡したこともあります。また須永は慶応義塾に学んだとされていますが、卒業名簿に載ってないのですが、何か須永文庫の中に証拠がありますかとの問い合わせもありました。

写真5　金王均筆による山号扁額（妙顕寺）

郷土博物館にお願いして調べたところ、慶応義塾大学別科の通知票を見せてもらいました。別科だったので調べた卒業名簿に記載されていなかったのかも知れません。おそらく、私のホームページには須永元だけではなく、福沢諭吉、金玉均、朴泳孝、禹範善、禹長春、黄鉄、頭山満などのキーワードから飛んでくるのだと思われます。

このホームページが縁で、大阪ソウル会事務局の本多雅嗣氏と開化派リーダーたちの日本亡命という著作で須永元を取り上げて下さった医師の姜健栄氏の招きにより、大阪で「須永元と朝鮮からの亡命者たち」という題目で講演をしてきました。この時に言われたのが、須永元は韓国政府から勲一等をもらってもよいほどのヒューマニストですね。ぜひ須永元の日記を解読して欲しいとの依頼を受けました。しかし、佐野に墓地がないのがとても残念ですが、とも言われました。これほどの人がなぜ佐野地区であまり有名ではないのでしょうか。それは甲申事件とそれに続く日本が深く関わったとされる閔妃暗殺事件、さらには明治四三年（一九一〇）から昭和二〇（一九四五）年までの三五年間以上に渡る日韓併合が須永の評価に暗い影を落としているのは間違いないことだと思われます。

四．ゆかりの地（1）

大阪に行く前に郷土史研究家（安蘇史談会会長）の京谷博次氏と佐野市立図書館及び郷土博物館の協力を得て、須永元の足跡をたどることにしました。図書館では書庫にしまってある膨大な須永文庫の一部を写真に撮らせてもらい

ました。また郷土博物館では須永が朝鮮に渡る前に書かれたと言われる「送別会の人々」と呼ばれる絵を見せてもらいました。これには須永が学んだ二松学舎の創立者であり東京帝国大学の教授であった三島中州、そして師事をした元彦根藩家老の岡本黄石など須永を含んだ二四名のそうそうたるメンバーが描かれています。この送別会は東京の料亭である星ヶ丘茶寮で行われたと言われています。この絵は世田谷区立郷土資料館で開催された岡本黄石企画展の図録の表紙に使われました。また咸臨丸でアメリカに渡った勝海舟からもらった「全快を祝って」と呼ばれる書で、内容は「鬼手脱命」と書かれている書も写真を撮らせてもらいました。また黄鉄が故郷をなつかしく思って書いた墨絵や須永屋敷の絵も特別に見せてもらいました。さらに須永邸模型もありましたので、現在の市営プールの所にあった当時の屋敷を思い浮かべることができました。

写真6　送別会の人々（星ケ丘茶寮にて）　跡見玉枝 筆

作家の角田房子氏は昭和六三年（一九八八）九月一七日に堀米町の妙顕寺でいとなまれた須永元、金玉均、禹範善、黄鉄など亡命者のための法要に出席した帰りに、今では故人となってしまった須永元研究家の藤沼博さんに連れられて須永邸跡地を訪れています。今では小さな日本庭園と建設記念碑だけが遺されており、碑の裏面には須永與右衛門の名前を読みとることができます。また市営プール入り口に、「須永元先生邸宅跡　昭和三十八年二月二十八日佐野市長　鈴木達三」の文字が花崗岩に刻まれています。

写真7　須永邸跡地の碑（佐野市大橋町）

五．ゆかりの地（2）

須永が庇護した朝鮮からの亡命者たちは、須永文庫以外にもいくつか佐野市内に作品を遺しています。甲申事件で亡命した金玉均は妙顕寺の山号扁額である開本山の文字を揮毫しており、朝鮮独立運動の志士と呼ばれていました。また閔妃暗殺に関わったとされる当時訓練隊第一大隊長李斗璜は、図書館裏の興福寺の山号扁額である天祥山の文字

を揮毫しており、道から見ることができますので図書館からの帰り道にでもぜひご覧下さい。

妙顕寺には須永が東京の青山墓地から移設したと言われている禹範善と黄鉄のお墓があります。禹範善は閔妃事件で日本に亡命してきた当時訓練隊第二大隊長です。この禹範善の子どもが禹長春、戸籍名須永長春で、五二歳の時に奥さんと六人の子どもたちを日本に残して単身韓国に渡り、韓国のキムチ用白菜を品種改良により作った農学者で、晩年に大韓民国文化褒章を受章しました。禹長春の人生は角田房子氏の著書・わが祖国にまとめられており、須永元を通して佐野と須永のことが詳しく述べられています。またこの中には当時佐野市郷土博物館学芸係長そして前石田副市長が須永関係資料について語ったことも載っておりますのでぜひ一読して頂きたいと思います。

写真８　李斗璜筆による山号扁額（興福寺）

またこのわが祖国は、ＮＨＫと韓国の番組制作会社シネテル・ソウルとの共同取材でドキュメンタリードラマ化され、日本では平成三年（一九九一）二月二日にＮＨＫスペシャル「わが祖国　ある日本人・禹長春」、そして韓国では公共放送のＫＢＳで「祖国・父と子」という題名で放送され、日韓共に多くの人々の感動を呼びました。この中でも須永元の顔写真と妙顕寺の前の道路からお寺を見る映像が使われています。

そして禹長春の四女が朝子さん、つまり禹範善から言うと孫にあたりますが、彼女が現在京セラの名誉会長である稲盛和夫氏の奥さんです。先日、私は禹長春の次男のご子息から長文のメールを頂き、最後に禹範善の曾孫、禹長春の孫で、私の本籍地は栃木県佐野市大橋町二〇七三の一　須永元さんのお屋敷跡の住所です、と結ばれていました。またホームページ上で公開されているものとして次のような文章があります。「私は須永長春の孫です。栃木県佐野市とは浅からぬお付き合いがございまして、現在も本籍地は佐野市大橋町となっております。韓国ばかりではなく日本でも祖父の事が紹介されており、誠に光栄であると存じます。今後とも佐野と韓国が共に栄えることを心よりお祈りいたします」。

写真９　禹範善と黄鉄が眠る妙顕寺

六、ゆかりの地（3）

妙顕寺にお墓のあるもう一人が黄鉄です。彼も閔妃暗殺事件により日本に亡命してきた一人です。しかし後に韓国統監伊藤博文の知遇を得て、農商工部協弁となっています。しかし日韓併合後は政治の道を外れて日本に移住し、書画の道に専念しています。『佐野市史』の通史編下巻にも詳しく載っていますが、昭和二年（一九二七）一一月一八日に所沢飛行場を飛び立った陸軍の練習機が秋山川河川敷に墜落しました。この時の遭難碑が堀米橋河川公園内にあります。台座の大きな立派な碑ですが、碑文を書いたのが須永元で、書が黄鉄となっています。また音楽評論家で有名な田川律氏は黄鉄のお孫さんであり、佐野にも二度ほど訪れているそうです。さらに祖父である黄鉄のことを朝日新聞に発表し、世間の関心を集めたこともあると聞いたことがあります。

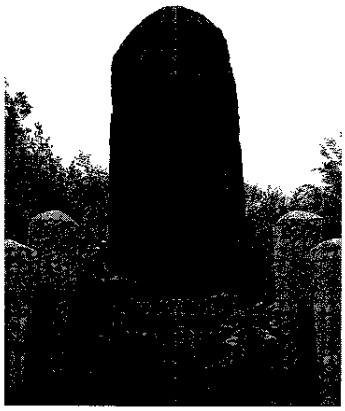

写真10　堀米橋河川公園内の遭難碑

また妙顕寺には閔妃暗殺事件の首謀者だと言われている三浦梧楼陸軍中将、閔妃事件当時は朝鮮公使でしたが、彼に書いてもらったといわれる御影石の水盤があります。そこには遠塵離垢（おんじんりく）の四文字が掘られており、裏面には元の父である須永市重郎の名前が刻んであります。また須永邸から移築してきたという水神様も祭られていますが、立派な彫り物で飾られた白木づくりのおやしろです。隣の石碑には菊沢水神と寛延三年、西暦ですと一七五〇年になりますが、今でもこれらの文字を読みとることができます。

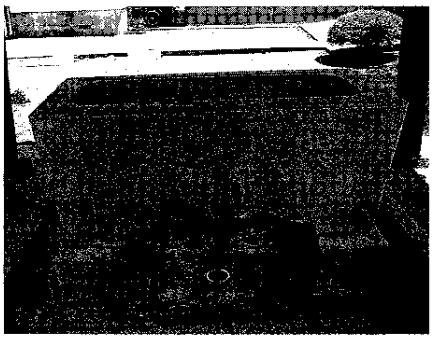

写真11　三浦悟楼の名が刻まれた水盤

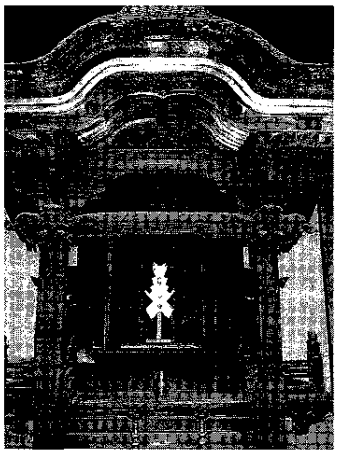

写真12　妙顕寺に移設された水神様

堀米八幡宮の御影石の鳥居は建設費の一部を須永が負担したと聞いておりますが、そこには明治四三年（一九一〇）八月日韓合邦記念と刻まれています。そこには日韓併合と言う文字ではなく合邦と刻まれており、併合という文字を使わなかったのは、須永のあくまでも日本と朝鮮は同格であるとの願いが込められているのではないかと聞きました。ちなみに須永の

戒名は妙国院輹斎日韓居士です。

最後に田中正造との関わりですが、須永の父親が佐野町の町議会議員をやっていた関係から、頻繁に行き来をしていたようです。これらの事を考えますと、佐野市内に須永を巡る歴史散歩コースが作れるように思いました。

写真 13　堀米八幡宮の鳥居

以上のようなことから須永元は佐野市が生んだ偉人であることは間違いなく、佐野市の保有する須永文庫も佐野市の宝であると思います。

七. 謝辞

須永元に関係する場所を案内してくださった安蘇史談会会長の京谷博次氏、並びにお忙しい中、須永文庫を見せていただけました、佐野市図書館及び郷土博物館関係職員の皆様に対してお礼を申し上げます。